



重修真書太閤記

七編八



18 19
459
卷 68

消
福
永
重
修
真
書
大
問
記
七
編
卷
之
廿
二

重修真書大問記七編卷之廿二

齋藤内藏助石田三成問答の事

并秀吉内藏助問答の事

一柳市助田丸幸太夫兩人堅田へ趣き件の盗人
と案内者と齋藤内藏助が隠れ家と圍み手者多
く打とつ共終り内藏助と搦め取三井寺へ歸り
筑前守の本陣へ差出し盗人と段々詮義の上内
藏助が下男あり由露顯し是を誅し内藏
助と筑前守の本陣あつめ石田左吉三成と
て事の始末と尋らむける三成今年廿歳の心

同
會
攻
印

大問記七編卷之廿二

と知されい書院の椽へ立出ていりし齋藤内藏助
御説あるを其方車伯父の仇とその儘に捨置却て
義龍龍興し仕へ其國滅亡しとい稻葉一鉄齋も扶
持をくしとやうに稻葉と棄て明智日向守も仕へ日向守
の為に筑前守と仇とをくしと近頃以て心得と去へ
るそ一城の主とくしと縄目の恥とあひしといひ
ひしうい内藏助もくしとめ程の目とあむり點然と
して居たりけるら三成が此詞を聞とそのまゝ大
の眼と活と見開と居とけ高となりて其方の筑前
守の小性もて石田尤吉もくしとそのけりといひ
だ侍の禮義と辨へざるも断つといひ強て是を咎む

あゝ及むばたゞ車くるまの始末と知されい九様の事
といふやうな一語も無益のことなきめり聞
とん能とけい某伯父の仇と打ど義龍も仕へ
い子細あり其方風情の知べことあはれとも
その荒増といふべこと抑義龍ぬい道三の實子
みあはれ美濃國の本主土岐左京大夫頼藝ぬいの
子なるとい美濃國の侍とも誰りの其下風も立んと
と願ふとざるべことされい某義龍ぬい仕へい生
國の本主と主とたのむよと仇の子も仕へいあ
らざるやう

流布本も義龍へ持是院妙椿の子とあり誤なり

抑持是院妙椿といふ濃州稻葉山の城主齋藤
越前守利藤入道の事なり武藝郡宇多院村陽徳
寺に持是院三位大僧都大年妙椿といふ位牌あり
文明十三年二月廿一日に卒利藤の子新四郎
利國その子豊後守利隆のちよ長井と稱せ入道
して持是院法印權大僧都岱宗妙全と云享祿三
年正月十三日利隆の子藤左衛門長弘西村勘九
郎の為に弑せしむ齋藤の長井絶たり然るに義
龍の永祿四年五月十一日に病死を辭せしむ三十
餘年守護人天利那一句佛祖不傳とありて享祿
三四年に生じし人なり妙椿の卒を文明十三年

年あり五十年に及ぶその誤辨とすべしといふ
稻葉ヶ家ありしに同國同僚の好むと但是一旦
一夕の為のこたえに筑前守松下加兵衛が許し
居むひしと同一となり其後日向守の招きを應じ
たるに筑前守の織田殿に仕へると一様と思ひ
あふべし次は日向守の為に筑前守と討んと計
すし日向守の我等とありて頼母と侍あり
といふこれつとに我等もやの頼母とくを計りし
なり日向守が織田殿と侵し参らるる罪とて天道
を定めあふべしと我等が彼是といふべし事なり

小敵とあり仇と有りたり夫の今と何とあり
ん餃いりり酒のいうふといこれ内蔵
助眼と見開と尤とい筑前守美濃國より來り
一時木下藤吉郎里股とて見参其後幾度り出
會し長濱とて茶湯の昔それと思つ我等も老朽
ととあまのつと身と有りて榮枯たぐひ
ふ地と替あれの同じ何と分て驚くべと答
ある時筑前守あり返り左吉くと呼ぶと石田罷
出て筑前守の後よりこよる筑前守内蔵助とむ
成程一見し御見知あるといこれ一内蔵助
成程一見し心持のいといと答ある時筑前守

左吉よく心得ゆく内蔵助の實の侍なり榮枯互ふ
地と替るといことと思ふて見よ山崎の軍
筑前守打勝つれば今日内蔵助とてふ申請しぞ
やの山崎とて筑前打負たれば汝等より立上た
る浅野蜂須賀あど加様ふ内蔵助が前より出も
とて其方いと及びもなとて云てどのと笑
ふ内蔵助これを聞あ木下といこれ昔より凡
人ありと思ひつるが何あも心の内の廣く
人を人とも思ひまぬ荒涼さいうさ其心とて
の我國へ言ふ及む三韓唐土までも御太刀風お
なびさいびさめくる身と有りて内蔵助とて企

ても及ぶべしと云う然年來の御芳志あり早く首
とめさしゆへと申けしと筑前守それも急ぐと云
日向守あり織田殿と討つるをこれに我等が
主の仇なり内藏助あとの日向守が所従あり
當の仇と云ふも非ぞ心静み自害あはぬといこれ
よ内藏助のやく自害をぐく山崎よと戦死を
山崎をのがして堅田よりくとも時ありて
御側へ出たる一尺二三寸の刀のて侵すまの
をんと思ひし故よ自害の間へ幾許も有しと自害
をて斯捕られていなり又物許されし筑前守と
のと運くく指合ぬ山崎堅田を脱する心

ふ偽のふふ似たりと云て承引を筑前守ありと
と落し臣とて主と云龍様と思ふべし類すれは
ふ侍うめと云とる感し嘸り腹の空川らん心
付あり者どもとて料理と出し者と取て酒と勸
めその夜の一間と云のらひ心安く寝ぬと最懇
ふのては
流布本此段謬誤多くと云ふたは今梅月堂
の筆記に付てあれと改作を
齋藤内藏助利三堅田よと囚これ三井寺よ至て
筑前守と問答の事實真如堂よ記文あり誰人の
作といふこととらぬ末よ天正十八年七月と有

今舉る處と全く同じ梅月堂うあるべ此と取て
記とありんせふ知人あれはう彼處ふ至らん
人懇ふ堂主ふ請てあれと讀べ

内藏助利三辭世の事

并郷意三奸計の事

天正十年六月十三日の夜小栗栖とて明智日向守
土民のこめと手と負五六町へ引退しうとも痛手
あどべ馬あり下腹を切しと溝尾勝兵衛茂朝辛く
しと首と藏し骸はそのあらしに置き置けると土民ど
も見出し拮据の紋の金物と目あらしと三井寺ふ

持行けとて筑前守あしと見分し日向守ふ相違あり
といくと首あらししうは是と探り求めけるふ
勝兵衛の脚の泥よとこれとて終る深田のう
あらし求め出し骸と繼て日向守の峠と磔とあそ
掛たりけと然内藏助ふい自害とよとひしうと
も又物と取て筑前守ふ切掛らんとといふふあう去
る斬べしとて日向守ふ連行けるふ紙筆と請て
主仇在前白又空 殺身曝尸報君公
可憐晋國刺衣客 共感生涯一夢中
辞世の詩歌と書終り首さしのごく打をけり太刀

取迫涙落し實もあし侍とそらぬ袖とぬる
さぬいひりりげをそのち獄門のあけらさる
爰山崎合戦の前日齋藤内藏助の大明り度り
たる刻絲の錦と徑山寺の香爐とよび黄金百枚の
まことのことして御意三がゆき家へ音信けり意三
の美濃と立退しより仕宦とんも取持人のあさ
るる太刀刀茶湯道具と古書画の類と諸家へ取次
その日くと暮しける然るも美濃よて不快ありけ
る齋藤が尋來りしうへ何事よめと出合てや東
西挨拶然内藏助申ける明日山崎へ出陣の定
めなり某の先陣と承るる生て再度めへらとれ

のくべ此黄金百枚御邊へ贈り参らるる處なり某
と永訣のめことおのひあふべ此刻絲錦と
香爐及び重代の太刀刀あれ四人の子供へ世治
りそのら渡し給らるゆへ此事頼に参らると
態と参りひつらといへ意三心中大に悦びこの
貧窮のその中へ黄金百兩夢よのあはぬうとおめ
て悦び嬉しきさ歯の根もあは空涙とこわし
川一族の好として思ひふれしこの品よことよ
以て悦び入の仰の如く世間静まりゆひの御子
息達と尋ね求め夫々御渡し申べと最たりう
請合べ内藏助も大に悦び然山崎へ出立たり然る

ふ山崎の軍ゆふと内藏助堅田ふめくも尋出
され遂に日岡にて斬し獄門よりけらと聞
えしつべ意三も内藏助が縁坐なりといわれやを
んと安んじ心無りけるが急度思案して日岡に
忍び行光秀と利三首と盗取りての藪とて
こけひそり土中埋むけり筑前守ふれと聞大
ふ怒り是は必定明智余類の所為なりとて
屬託と掛るとそ四方の辻々へ首と盗りゆの
訴人をさるる於ては一類たり共その罪とゆるし
金三十枚をさるるべしと書記しとて立ちたり意
三これとみてその究竟の事なり此首の盗人の内

藏助の子の頼母なりと訴人を頼母召捕して刑
ふ處をさるるべく我等は一類あれども訴人の忠
よりて罪と許され黄金三十枚と賜り其上頼母
はけし内藏助が預けし刻絲錦徑山寺の香爐と
よび太刀も刀も我物とて獨笑して筑前守の陣所
ふ至り光秀及び内藏助が首と盗りて内藏助が
子の頼母よと訴へけり筑前守ふれと聞其方何
者やれば左様またしうと申すと推りて尋ら
とされば私事内藏助が母方從弟郷志津摩が
子とて美濃國に罷在りし時共義龍龍興ふ仕へ
し者とて其由緒より此間頼母参りて内藏助

ぐ首と葬る旨と語りていと申あつるに淺野彌兵衛此
 事と申次けるに筑前守何様さも有へし但頼母と尋
 出し召寄て詮議の上いよく意三り申旨相違なく
 へ黄金三十枚賜らるべしとの意三の者よ
 預けゆくへと下知をさすにうへ意三の三条堀川の
 名主よ召預らるゆづく頼母が在所と穿議ありけ
 るに泉州堀ある由聞えしうへ堀尾茂助吉晴と
 使よて堀へ下され齋藤頼母と召せけりその時頼
 母へ山崎と立退し日よ髪をりこむち立本と号し
 て居たりけるを尋出しうへ齋藤頼母今へ立本
 たしうへ承られ抑明智日向守へ八逆の大罪人并

入其方が父の内藏助へ逆罪與黨と云と以て日の
 岡の梶木よめけりしと其方盗と取し由たりし
 入言上をさるもの有是よ依て某筑前守の使たりて
 罷向ふより早某と共に筑前守の本陣よ参上し盗
 ろし意趣と申しへとつて立本たちりて堀尾
 殿よの遠方への御使近頃以て御苦勞よひ然あが
 ら主親の首と盗らしとつて以て覺え無之その上
 獄門よりけらして日と盗らし日と某が當所よ在
 一日とと御詮議ゆきて速に今り申へし依て此處
 の役人より某が當所居住の日次と御取りへと申
 入りたり茂助實尤の事なりとて是と處の名主并よ

立本りつほんグ止宿とどめとて鉄炮師次郎右衛門てつぱうしじやうゑもんとて日記にっぴとて
とて是と取てとあらし立本と召連めいれん中なかつの京都きやうとへ引返ひきかへ
筑前守の本陣ちくぜんしゆの本じんに至りては浅野彌兵衛あしのやひべゑ預けけり詮
議ぎへ明日と定めけり

流布本立本繩りゅうふほんりつほんじゆの説せつあはとも罪狀定ざいじやうじやうする内何
れとの罪人ざいじんとも士品ののの繩じゆとくると律りつの文ぶんあり
つゝ是これは後人の臆説おそせつあれば是と除く又堀尾茂助ほりおし茂助吉
晴よしはる天正十二年四月長久手合戦の後三万石と領し七帯
刀先生たきせんと稱し十八年遠江濱松十二万石と領し慶長五年
四月濱松の嫡子忠氏ちゆうしと殘し吉晴よしはる越前府中六万石
と賜たまはりて移りける其年十月忠氏雲州と賜り出

雲うんと稱し廿三万五千石と領し松江に住と然るも忠氏父の
先まへより慶長十三年八月早世し嫡子小太郎忠晴ちゆうせいとて
ニオヤリて祖父吉晴よしはる國務こくむと行ひける同十七年卒
以行年六十九いぎやうねんむそくとて忠晴六歳ちゆうせいむさいとて家と繼つぎり寛永十年
九月廿日早世し嗣ついでるとして家絶たり
刻絲錦くつきしきんは美濃國齋藤家の先祖宋朝みのくにさいとうけのせんぞしやうてうより傳來とて
云り美濃國持是院みのくにぢしえんの記き刻絲錦也くつきしきんなりは延織のりの錦しきんとも
云われ齋藤さいとうの家の重寶ちゆうぼうとて中なかつより牡丹ぼたんの圓輪えんりんありて
四方しやうほうより獅子ししと狂くるをその外ほかより青海波せいかいばをこころやく
意い三さんが心こころより直ちよくより齋藤頼母さいとうよりんぼと召捕めいとらて重おもき罪科ざいこより行いく

あるべし然ハ心安ク黄金三十枚と以て樂と極めらる内藏
 助預けたりし重賢とそとく沽却しそとく價と以て酒
 ふ代んとあひひし我身ハ坊内預けし頼母の立本ハ召
 せしらども意三と對決の上と有べ我偽の露顯やとんと安ん心
 も無うけらるの首正しく藪の蔭よりくあり是ハ
 何も適うべく何ともいひ争うて言うちぬべしと意
 と定めて其日と待心のうちあをこころあけし
 三條堀川ハ御意三住處とそ民家の裏ふ少々の地ありこれハ前
 田徳善院所司代の時悪人の宅地なりとそその宅と壞ち其地を
 掘て池とあり向後人とそ住めばと掟てたりといへり
 重修真書太閤記七編卷之廿二終

重修真書太閤記七編卷之廿三

御意三齋藤立本對決之事

并天満宮愛樹の事

羽柴筑前守秀吉ハ明智日向守光秀の骸と首と尋
 出して繼磔しつげ齋藤内藏助が首を獄門に掛け
 ろし何れの共知び二川の首と盗取しつげ筑前守
 大に怒り黄金三十枚の屬託をうけ詮議ありけ
 ろし御意三といふの訴げらる内藏助が二男齋
 藤頼母といふの業ある由を明白に言上しけ
 ば筑前守堀尾茂助吉晴と使とて泉州堺へ遣

いづ齋藤頼母を召しけるは頼母今ハ立本と號し
落髮の体ゆれども茂助と共に上京しけむべし
彌兵衛は預けられ日と定めて意三と立本と對決
あるべしと下知をさる既に其日とありしうへ本
陣の庭上ハ兩人と召出さる椽の左右ハ淺野彌
兵衛長政蜂須賀彦右衛門家政とらめ老臣の面
面列座とり正面ハ筑前守出座あり石田三成を
以て仰出されけるハ明智日向守事ハ逆の大罪人
なれば法律と正して天下万民に示さんぐ為日の
岡ノ礫とて齋藤内藏助事ハ彼光秀第一の家臣
なる上縁者あればハ逆與黨の義と以て同所と獄

門とて是と掛らる是政道と重んぶる處なり更
ハ秀吉が私ハあつ然るハ立本二川の首と盜と
取由是ある意三訴へ出さる除以て相違あるハ
と有しとて立本畏て言上仕るハ存も寄ぬ御疑を
蒙り事近頃迷惑の至りハ如何様日向守事ハ主
君なる内藏助ハ父なる其首級と盜と取て葬りハ
事忠臣孝子の所業と申べくいそれと立本ハ所業
とつこれハ事立本ハ身取て相應仕りとも立
本ハ去十四日今日追泉州堀ハ在て入道仕り
讀經三昧ハ入り事堀の者證人ハ立ハ處明白ハ
何とて堀りハ十四五里と隔ハ日の岡ハ來り二

の首級と盗と取可申哉證人どもの日記と御覽あ
 らべ立本なるゆ由へ決着仕るべくいと申けし
 其日記是へと仰出されけりまう立本側は居
 たりける證人ども日記と石田よりけり石田
 是と請取とありち淺野よりけり淺野あれと一覽
 直に筑前守に奉る筑前守日記を熟覽し初に次
 小意三其方立本が首と盗らと云始末今一應申
 上べしとありけしと意三幾度も申上べくいと
 も今少一人と嚴敷御詮議しと申に筑前守
 入るる其方け差圖なり尋てよけし此方と尋
 るぞ兎も角も意三今一應此間申上は通り申上べ

しと有けるまより意三申上る日恨失念仕れ頼
 母拙宅へ参り間其方へ山崎より出奔し行衛しと
 どと聞しと只今何處より参り哉と尋いついで
 とは又内藏助并日向守殿の首級と葬いそん為
 り上り何處り葬地よりと申ゆると然
 り拙者何處と申迫もか一日の岡の藪の陰を然
 りふべりんと申ていへ悦び入と申て出行いと
 言上筑前守立本意三が家へ行意三小葬地と聞
 て日の岡の藪の陰と云べ今更に陳ぶる未
 練なり比怯なり神速ふ白状とべしとありし時立
 本申ける様この意三と申めの父が美濃入罷在り

時同トク齋藤ノ仕テハトモ齋藤滅亡シ父流
浪ノ後一向不通ヨハ今程何處ニ任居ル不
存ハ何トモ意三ノ家ヘ尋ね行可申哉リ父ノ首
ヲ主君ノ首ナリ盗ラシ首ナリ尤ハと疎々敷人
ノ相談及ムベシ理カシ其上意三ノ家ハ何處ニ
ハヤ日ノ聞近クモハルモ意三ノ問モ仕テハ
トモ意三ノ家ヲ知ラズメノの盗ラシ首ヲ携エ
人ノ家ヲ尋ねテ此道理ヲ以テ御聞ツケある
クハと申テハ意三赤面シテ立本何トモ
おのどハ偽ト云ズ内藏助山崎出陣の前ハ我等
家ヘ尋來リ云々といハルモあトハ美濃流浪の

後不通といハハ偽あるベシ其上此間我等ノ家ヘ
來リトモお隠シテ意三ノ家ヲハ不知トハ空々
トモ言條リカ偽多クハ早ク尋常ハ白狀
トモおといハハ聞テ筑前守ノウリ意三内藏助
汝ノ家ヘ何ノ用アリテ行クぞ申上ベシ云
トモハ意三承テ内藏助山崎出陣の前我等
家ヘ來リ重代ノ品々ヲ預ケ戦死ノ後子供等
トモハ渡シ呉ハ様頼ミハ疎遠ノもの何トモ重
代ノ品ヲ預申ベシハ此處ヲ以テ立本ガ申條ノ偽
トモハ事御明察有ヘクハと申筑前守意三トモ預
リ品ヲ立本トモハ内藏助ノ子供ヘ渡シテ

大月己二編卷十三

四

とあり一くい意三あるものと疾く渡してゆと申時
筑前守立本ふ意三より何と請取りゆと尋むふ立
本更し請取り品ありと申けるより去り意三ヶ
家と改め見ると有て直し人と遣りし悉く穿鑿の
り一くい彼刻絲錦徑山寺の香爐とよび齋藤重代
の太刀も刀もその儘ありけるを取持て筑前守
の前は居あへり筑前守られと見て立本ふ見
覺ありやと尋むへ立本立あがり是と見てい
ふも齋藤重代の品なりと答ふ筑前守意三は向ひ
只今立本くらめそれくへ渡せと云品いよふ其方
の家よあはべ其方只今眼前は偽と申たり然ら

二川の首とへ汝り盗らそその罪と立本ふ買せん
とどし相違あはれ有のまらと申へとありし
時意三のゆたよひく首と盗らし立本は相違
なりいと申より何と以て證據ととるゆと押返
しおしと尋むらば意三申ける様何と仰られ
ゆても首と盗らし立本よてゆと立本二川の首
級と持居ゆよと適るべと様ありゆと申立本の意
三が家と知む何とて主と父の首級と意三が家と
持行べきは是全く意三が偽なりといふ互に相争
ふて果しらるるは共筑前守のうあもしと立本
が偽なりぬ由と明白に知をくらゆと思われし

北野の松梅院と召ゆる松梅院何事よゆとおの
 ども筑前守の下知られいこゆり筑前守の本
 陣へ参向ひ筑前守松梅院と近く召て北野の天神
 の無實の詭逢て太宰府へ流さると聞け去
 の昔より無實の難逢の天満宮と祈りて其
 験と得しと餘多ありとさけり實の荒々御語り
 ひへと有けるよあり松梅院謹て申ける柳天神
 の御事い天下よ塩梅とて一人と輔導天上の
 日月の万民と照臨かみかく在て文道の大祖風
 月の本主と申い内無實の横難とあれとあふと
 殊更よ深くおとすはい縁起よとく記し

てい又松梅櫻と執し思召ける假令の松の常磐
 の色と霜雪の寒冷よありて變をどいと忠臣孝子
 如何様の横難よりゆりゆりも其主親は仕ある本
 志と變をどるよ似たりと第一の御愛樹より梅
 の暮秋より氣と合て雪中よ蒼と發し青陽の春よ
 花と開る仲夏よ實と熟し一歳の日と竭し閑日
 の是より忠臣孝子の節操よ等し其實酸し塩
 よ藏し日よ曝しとめらるる櫻の我國よ限
 り色香よ立春より顯るる美と九春よ擅よとと
 嵯峨の御製よ賦しと申げし筑前守何様北
 野の天神の無實を雪めと詳し聞知たり然ら

へ爰も二人の論者あり互に言争ふと云ども端飯
とてたる證據あり因て社頭よ於て鉄火と握しめ
んとあつたの如何とありうべ松梅院のうら
も然るべくひ今度初ての儀といふは時々社頭よ
於て行ふこともいし是往昔探湯の遺風と覺えし神前
の作法もい罷飯りて支度仕りひちんとて松梅院
へ退出り

探湯の事へ應神天皇九年の御記武内宿禰と甘美内宿禰と
磯城川濱とて神祇よ請て探湯とて武内宿
禰無罪が故と手爛とて甘美内へ偽を言掛り
にありて手爛とてと云ふと見えたりとそれあり

百三十八年後允恭天皇四年味檜丘に探湯して
諸姓氏を偽とするのを正されしとありその時
に溼と釜の内よ置湯を煮沸て湯の内なる溼を
とて又い斧と火色よ焼て掌よ置とあり是今
の鉄火のいづれと知

齋藤立本御意三鉄火を握事

并齋藤兄弟繁昌の事
松梅院へ北野へ歸り社僧中と集めて評定しける
に筑前守の方よ争論の人あり當社頭よ於て鉄火
と握を其壹實と定むべしとあり神靈正しく其驗
ありて我大壇那とて社頭を再興とてべし又

靈驗のくく社頭と破却とべしといわれり筑前
 守の織田殿の切者として中國の探題職たりしが
 此度明智日向守と討滅し天下の推して執る人
 意に叛くべし善事あるや去とて神靈實に驗と顯
 らしむるべしや否凡智ふ計り知づるやとい
 ども兎角に神慮を仰ぐべしとて妙藏院寶成院密
 乘院常隆院常光院のつとも會合し本社へい
 ふよ及むる宰相殿和泉殿三位殿白大夫老松福部
 櫻葉宮早取宮一拳宮三所王子社や打めらるる
 夜一夜祈誓たりけり夜明とて淺野彌兵衛長政
 蜂須賀彦右衛門大谷慶松奉行とて松梅院より來

集り鉄火の事を取行ふ抑この頃北野にて仕來る
 處の鉄火の式といふにまづ神前に石爐を築て炭
 火起しその中にて大なる鉄の棒を焼こすと神前
 の三寶机に置べ三寶机焦して炬の立のるを相
 圖し論人進み近づきその鉄棒を手取り取て元の如
 三寶机に置しむるやうり所論無實なれば其人
 の手いささくも焼たぐるとか所論いつらうか
 らざれば其人の手焼焦るといへり神前の社嚴
 ととのひまうが社僧中宮仕神人残りなく參上し
 作法の如く石爐に火を熾しけるは焰々と燃上り
 ける中へ彼三尺許も有らんと見ゆる鉄の棒二本

然意三と段々拷問ありて處全く以て内藏助が預
けし品々と横取をんよ立本ありてい事の妨げか
うと思ひ付てその車及及び由白状とてしう筑
前守の明察を人々感心し意三と背中で堅よ三
所筋と付その筋へ塩をよよ一日炎天よ曝し
そのうち日の岡峠よ礫よりけらとて内藏助か
首とば真如堂の僧衆の中よ連歌の友ありけるが
乞受てられと葬りしとて立本の虚名忽よ暗り
つ其勇烈世よ希なりとて加藤清正あさりよ懇望
しあれと預り立本を改めて齋藤伊豆守利光とい
ふ清正肥後國よ入しのち軍功を顯しけりとい

万石と與へし一手の頭よたりとて
齋藤伊豆守利光は永禄十年下卯よ生れそ天正
十年山崎合戦の十六歳なりその妹春日局幼名
い福子天正五年丁丑よ生る天正十年ハ六歳の
時より後林ハ左衛門越智正成の妻とてあり慶長
八年男子と産その乳を以て江戸若君の御乳母
よ奉仕し廿八歳の時より男子ハ後よ稻葉丹後
守正勝と云又春日と云私号京都將軍家の上臈
女房と代々春日局といふ春日ハ京都の地名よ
て今ハ丸太町と云此邊よ女房の里亭有し故よ
しう云しなりそれよ習ひて三代將軍家の御時

大問已二編卷十三

この稱号を立し、寛永二年湯嶋小天澤山麟
祥院と建立し、冒山劉和尚を開祖とす。同十八年九月
十四日春日局逝去。春秋六十五。此御局の蔭にて家記
とす。の枚擧ふ暇あらず。

朝鮮へ渡りて、處處の軍功多かりし中、小の慶長
二年伊豆守蔚山と龍城の大明の總大将揚鎬と
いふもの間及び百力の軍兵を率ひ、十二月四日蔚山
と圍み、数万張の弓鉄炮を一度に切て放ち、ついでその
響の實も天地も動揺せりと、野城中の齋藤伊
豆守加藤清兵衛小代下總守佐々平九衛門毛利家の加
勢筑紫衆と堅め、浅野左京大夫太田飛驒守毛利

家臣宇戸備前守の蔚山へ入らんとて、顔湯といふ
處に陣と張て居たりけり。然るに、大明の大將小吳
堆忠といふもの三千人よて、浅野が存候の勢二百
人一里をこえて陣どりしと、引圍て一人も残さず
打取たり。左京大夫のれと聞、今日蔚山へ打入と
答ふれども、二百人のめのと討とれを見ぬあり
よて、入城せむとあるいさ、押詰て一戦をんとし、身
をゆんで下知せしとす。うへ太田も宇戸も是と支
え仰いさるる事、やがて大明の百万余騎つらゆか
りゆい、味方難義あるべし、何とすも蔚山へ御
入ひて後御合戦いべしと申あがり、共左京大夫耳ふ

も聞入は吳惟忠が陣所へ無二無三と切て掛りぬひ一番左
京大夫鎧と入手と碎らるる戦ふれはるる聞えうへ齋藤
伊豆守真先は開て切て出浅野が左より鎧と入り扣え立
うへ齋藤が手へ三百八十九人打取たりぬと云ふは吳惟忠
も終よ叶へば引退く此時清正より西生浦と云處に居られ
ける左京大夫大明人と戦ふと聞え彈正より左京と頼むと
いこれしよ左京討てて清正生て何うをとんと直打立ひけ
るが伊豆守左京大夫と助け勝軍たりと聞えひも
清正が心と知つるの哉とあり感心と云ふと云ふなり伊豆
守後よ佐渡守といふ子孫今も繁榮と云ふ

重修真書太閤記七編卷之廿三終

重修真書太閤記七編卷之廿四

干菜寺住持御朱印の事

并妻木荒木浮沈の事

明智日向守光秀が妻の弟妻木主計頭範賢へ天正
十年六月二日の夜江州より下向し伊香浅井坂田の
郡と切從へ長濱の城より入千餘騎と以て猶も近邊
と打靡け居るけり安土の左馬助の許より山
崎の合戦心許あげぬ出張する由申來ふ其後近
邊よて羽柴筑前守大軍よて攻上り山崎天王山よ
陣と取るとも云味方天王山と襲ふて侍大将討死

六月廿二編卷之廿四

と一あど種々の風聞取沙汰定うなるは如何なり
行世間とあると案ト煩ふその處へ十四日の曉方
へ早山崎の軍味方敗して勝龍寺の城も落大將明
智殿の存亡つゞぎ慥あつたとも大形討死と聞え
しうの主計頭も大に驚然らば北國勢も寄來ふ
べし美濃尾張の勢も襲ひ來らん何とも此勢計
よして籠城も心許す安土の左馬助ハ山崎へ出
張しつゞぎ相談とてく様もす一兎も角も坂本
往て明智の奥方又ハ長閑齋の心と聞てのちと思
ひ定め阿閉万五郎と諸侍と添て城に残り其身ハ
手勢十餘人と召連湖水と船とて坂本まで十六り

と只一時漕渡らんと押出しける處に折る伊
吹半風とびりくあり來うて船とゆる上ゆる下
ゆるける内よその船覆うて妻木とらどめ一人も
残らば湖の底の深層とありにけり
淡海國輿地志畧ハ春夏ハ伊勢南風なり秋冬ハ
乾風あり春夏ハ遣る東浦より秋冬ハ西浦よ
しとつへ伊勢南といハ東南風のことあり曉より
日出迄ハ南風あると勢田嵐といハ其餘伊吹風
ゆきそ風よりを風あどの名あり咲風といハ春夏
の風の名なり秋冬ハ日ありといハ比良ハ講
の日の船人湖上の風と恐る論義と云ハ風の定

中らぬを云とてと日ひら和風わふうなりとてゆてと雨
とさそとつるなりとてと風かぜ立たつとてとあり
湖上うみの船ふねの大おほ丸子ま子こ小こ丸子ま子こあり是こゝを丸まる太た船ふねと云
他の船ふねの製つくとめとてと段だん平へい船ふね等らの製つくあり大おほ津つ
御代官ごだい極ごく印いんと打うつ船ふね總そうて三さん千せん九く百ひゃく三さん十じゅう九く艘さう
あり大おほの四よ百ひゃく九く十じゅう石いし小せうの六ろく石いしと至いたる此こゝ外ほかも長なが
濱はま米こめ原はら飯い浦うら等らの船ふねあり是こゝを彦ひこ根ねの極ごく印いんなり
佐さ和わ山さんの荒あ木き山さん城じやう守しゆ行ぎやう重じゆうへ左さ馬ま助すけあり山さん崎さきへ出で
張ちやうありへと申まを越こけるより然しかに打う立たとて手て勢せき
引ひ率りつへ安やす土つちへ行いく左さ馬ま助すけとて出で陣ちんとて跡あとを
うへと採とりぬと馳はけるゆとて往ま來らいの者ものの口くち

口くち山さん崎さきの軍つ敗ぱいと天てん將しやう戰せん死し今いま大だい津つと合あ戰せんあり
とゆと聞きて心こゝろあはれも大だい津つと打う寄よ合あ戰せんの体ていと
見みぬゆと馳はけるより又またもや人ひとの噂うわさとてと大だい津つの
戰せんは左さ馬ま助すけ打う負お湖こと馬まとて坂さか本ほん追お渡わたりつると譽うた
のいする其その跡あとあり只ただ今いま坂さか本ほんも落お城じやうと云いふより湖
上うみるより見み渡わたりとて坂さか本ほんの天てん守しゆ炎えん々々と燃も上あると
見て今いま迄いた付つ從したがひし勢せきを落おるると行い重じゆう只ただ一人ひとりと
どなりよりけり餘あまりのこととて如ごとく如ごとく斯ごとく如ごとく
何なにとせん一ひと先さき故こ郷きやうと立た歸かへり親おやとてこのこと見みぬ
見みらぬとも後あととも角かくも成なるると坂さか本ほんの燒や跡あとと
忍しのび通とり朽く木き越こへ丹に波は栗り田でん郡ぐん弓ゆみ削く板いた橋はしあり

大月己二編末十四

龜山近く入至り尋ねるる明智十兵衛尉へ去十
 三日入病死し城の誰攻むといはれけども兵士離
 散して空城となりけるを如何ある嗚呼の者の業
 たるや火を放て焼立しむども爰彼處燒損し鉄門
 石壁金城湯池とたのむ跡もなき玉樓金殿の變
 して焦土となり翠帳紅閨の野干のあり處となり
 盛者必滅の世の習ひ會者常離の時の運りて覺
 悟の上なりけり餘りて殊なればさあや山城守ある
 しの爰も休らひて思ひぞ出ることの春の元日二日
 の出仕よの直垂素襖着て烏帽子の風と競ひて
 又二月の中旬に氷破の矢合とて土岐の家風と傳

えの式作法の庭のをの角むり荒んとつめ
 ひさや移ろひ易さ世の様や替るよ早と人心頼
 めこなく成ぬば何處へ此身を寄てやと心と
 をぞ観念しひの浮世も交りて反逆與黨と後
 指さるる人とも恥しむ只一筋も思ひ切べし時
 ぐれや南無阿彌陀佛なとけあへて發心し誓あ
 切諸國修行の沙門といひけり柳羽茶筑前守ハ
 坂本を平け光秀が首級と探出し骸も繼て日の岡
 ふ磔し畢て三井寺を引拂ひ志賀の山越より白河
 へのりて入浴あり是より前小市即秀長淺野彌
 兵衛青木七郎左衛門と上京を浴中浴外と取鎮

めたりしうへ年寄肝煎戸主ども皆うち連て迎え
けり先陣の堀久太郎秀政千五百餘騎二陣の中川
瀬兵衛清秀高山右近大夫長房二千餘騎三陣の筑
前守の旗本五千餘騎あゆみの鎧を太刀がらう鎗
長刀弓箭鉄炮つらとめ綺羅とくごり羨々敷出
立を其次の大將筑前守投頭中と名付し梵と日月
と金銀を打て付紫威の鎧は金装の太刀と佩り
の大鹿毛の曙は沃懸地の鞍紅の厚總うけ静々と
歩を馬の左右に加藤虎之助福嶋市松片桐助作
加藤孫六脇坂糟屋平野とくごりめ一騎當千の勇士列と
正して五千餘騎あゆむと拂ふて打とごり後陣の

池田勝入齋三千餘騎とごり下りて丹羽五郎左衛
門尉筒井順慶あゆみの連とごり賀茂の川合と
あし拜し今出川と紫野へを趣とあゆ然るは白川
橋のりとうし鉦太鼓の音とごりよて多勢の聲と
たりけしは何れのをあし見て参ると仙石權兵衛
神子田半左衛門下知あゆむとごり兩人馳向ひ
見と僧五六人王禪うけて鉦たくと太鼓を打て
念佛のめくる世間と恐ともをばすこ憚もとば鉦
うち扣と太鼓と入て何とるを大將の召とあゆ
早参しと追立く引具して筑前守の前より出と
うは筑前守其方とも何故に武家より用ゆる鉦太鼓

と以て念佛の拍子と取りを定めて子細あるべき
包まひのめされとありけるまゝなりその中より老僧
をてこ出愚僧の今出川の東川原光福寺の住持僧
まておれなるの皆弟子僧まて此項世間ささり
佛器あるも大形亂妨とて木魚鐺鉢の類も
奪られぬまゝ道まて拾ひし鉦太鼓と以てめり
佛具を用ひぬのまて子細いぬ拍子と取り
事の諸人よ爰に念佛者の集りし事と知と申さん
迨まていと申とすうの筑前守聞届とすたゞしめ
くゆ京洛外も静謐あるべし然らば左の
恐るるも有まゝ是もその佛具を用ひて此日頃

その鉦太鼓ふつとて戦死するの冥苦と助け
ふとて陣鉦陣太鼓と賜りし住僧大まらる
あひ聞ひのゝ大将りふと響のりり退出を
その明の日光福寺の僧大徳寺の陣所へ参上し昨
日の難有上意と蒙り念佛修行勸化御免被仰出
事末代まての規模まていその御禮とて何ぞ
上仕り度いへとも元より貧僧の事なり貯へし物
ゆゑは是の心計まてゆとて干菜と一連持参して
奉りしうの筑前守厚く感心し是の能心付なり某
尾張まて土民の家まて生きたまへ百姓のこころ業の
能知たるなりこの程心と付て見るま京近國あり

干菜の見つぬと何故のゆとあひひし御坊のよ
くも貯えしなりいて某寺の名付て遣るにべしと
てその干菜とのと膳の裏へひしあてりと書て
賜るうけり是六齋念佛の總本寺干菜山齋教院光
福寺の太鼓念佛の由緒とあるを知らしけり
智恩院末今出川東河原光福寺のことなり

羽柴筑前守京都守護の事

并明智光秀の女名歌の事

明智日向守光秀小栗栖死日の岡曝され羽
柴筑前守入浴紫野大徳寺よ入て成事と指揮小
京都静謐の計略と廻らさしりんとよ京都の町人

地主群参して悦びと述酒肴と獻つ所願と申出の
あまのり地子錢以下免許の事とて先規の如く
たるべし但王城の事へ人皇五十代桓武天皇の御
經營よて朱雀大路と中みし左右二京と定めり
南より北へ九条の路を開き東より西へ十六の町
と區つと聞よ今見る處茫茫とて東へ如意白河
栗田花頂の山の麓よて耕作の地よ似たり西へ嵯
峨太秦愛宕月輪の山々よてたて一面の田畠なり
花洛とのひ王城と稱しける平安城の影もひし誰
り都の境と知たるゆと召さしり法橋紹巴罷出
一条戻橋と平安城の北極となりしれり南へ條

里と立ゆへに九条迄のまこと正しくゆへに又堀
 川むらゝのまことゆへにこの川とらゝあつて
 東へ十町西へ六町是むらゝの左京の坂なりとせ
 るる次第は坊保とちち條里と開りゆへに平安
 城のそのむらゝ延暦の舊規に復しゆ半大内裏の
 八省院豊樂院武徳殿太政官の廳左右馬寮左右近
 衛府以下宮城の内ふ立並びをれり外と京城と
 申ゆ又ハ羅城とも申ゆと申上りうへ筑前守深く
 感し然ハ内裏ハ何處と尋むハ紹巴謹で申ける様
 柳延暦の内裏と申ハ今堀川あり西へ二町去て大
 宮大路と申ハ大宮大路の西四町中ハ朱雀大路と

通しとせしむる西へ又四町その外と西大宮と申
 る中なる八町と内裏の東西と申ゆ又一条あり
 南へ十町二条大路に至る迄あれと内裏の南北と
 申ゆ只今内野と申ハむらゝ内裏の有跡あれハ
 今よその名と唱えゆさて内裏よハ十二の門正面
 と朱雀門その右と美福門その左と皇嘉門東面ハ
 郁芳待賢陽明門西面ハ談天藻壁殿富門北の正面
 偉鑿門安嘉達智と左右ふ立らとこり中ハ紫宸仁
 壽奉香常寧貞觀殿ハ南面ふ立つけ安福校書清
 涼後涼弘徽登花殿ハ東面ふ立らと春興宜陽綾綺
 温明宣耀麗景殿ハ西面ふ立らと此外東ハ梨壺桐

壺西上藤壺梅壺雷鳴壺あり是延暦内裏の荒増か
うと言上とれハ筑前守今の内裏ハの頃よりと紹
巴めさぬく申様内裏炎上度々なり其度とふ舊の
如く作らとあひし安元三年炎上の後大内裏と
ハ作らとを閑院すこハ土御門の内裏とて皇后宮
又ハ外戚の里亭と以て皇居とあこと是と里内裏
と申と一なり其後いふく皇室の稜威の衰へこと
あひつゝ只今の形姿よあつとあひしと申ゆと詞
よ定こあく子細詳よ言上しゆとハ筑前守實よ紹
巴ハ末代よ不思議の博識や天下の寶と仰出され
更ハ都の境と巡見とんよ紹巴參とゆ人々も共よ

學問いあへと打連立て巡らとあひすの洛中洛外
の境と定むとて東西よ堤と築と竹と埴らと
たりその上より見あひて都の真中よある寺々と京
極あり一町東へあし出北ハ鴨口あり南ハ六条
より屋敷と割とてこれ都よハ前田入道と所司代
よ定めらとたり
前田孫十郎基勝ハ京所司代村井長門守春長の
壻あり織田信忠よ仕へ近習衆よとて七千石領を
妙覺寺あり三法師君と女抱して江州へ立退を
の年落髪して半夢齋玄以とてひて天正十一年
五月廿一日京所司代とたり民部卿法印と稱し

後、徳善院僧正と云慶長七年五月七日卒行年

六十四歳妙心寺蟠桃院に葬る

爰、明智が妾猿丹後、女の腹に出生し、二歳

の男、子へ外祖父丹後甲斐、敷とう賄ひ丹波の

山國より、養ひける、あまう明智が家臣三宅堀

口、今峯内藤尾口中川、萩原あど云歴々の侍衆の

とも心を一川、此幼稚者と見繼んと千辛万

苦、あまう共反逆與黨と捕られ、やとんと天、背

と屈め地、居たりける、然、筑前守明智の

そ反逆の大罪人、あまうそれを従ひ、者共、主命、

付人臣の作法あり、それを何と答むべし、然、バ明

智、侍とも先非と知て、將來と改むる、於て、何

う、是と捕らるべし、勝手次第、主取を、設令、又

所望の侍、あまう召抱て仕ふ、と觸ら、り、バ

何、も、安堵の思ひとあり、己、々、身、の、程、有、付、と

み、あり、又、明智、日向、守、が、女、細、川、與、一、郎、忠、興

に、嫁、妹、背、の、う、ら、ひ、睦、あ、り、け、る、と、父、が、事

と、聞、あ、ま、う、忠、興、妻、を、呼、ひ、け、り、御、身、の、父、御、右、大、臣

殿、と、弒、奉、り、由、然、反、逆、人、の、女、と、副、ん、と、世、の、間

も、恥、我、身、の、心、も、安、ら、げ、然、と、父、御、の、許

へ、送、り、闘、諍、堅、固、の、其、處、遣、と、も、舟、州、三、戸、野

の、奥、忍、び、あ、へ、と、一、色、宗、左、衛、門、久、保、田、次、郎、左

衛門池田六之助三人と付て隠居せける然るに
山崎の軍敗れ明智日向守小栗栖死坂本城も
落明智の妻と始一族悉く自殺しつる由三戸野
でも聞けるるより忠興の妻も恐びゆく念佛
父母の後世の修善とかりけるに付添三人の
の申ける様此程の御事へ申上り付て涙の種
夫の返らぬく言なり万一反逆の御縁坐と
討手の向ひいん時御上の御恥辱と存け早御
自害して御上の御恥と隠されいと責ての御
事うと存いと勧めけさば成程最のことなり去か
ら爰に住も與一郎殿の御指圖なり自害せるとそ

も與一郎殿に申さる嫁しと夫に從ふと云女の
道にわが身明智の生れとも今細川の離
別妻あり再嫁らざれに我身一代細川の妻と云名
の削らざらば然らば我子の為の母は是れ細
川の母といふるべし何条爰へ直に討手の向ふ
に我夫與一郎殿都み存に聞えん筑前守あり
我夫へ離別の妻の頸討てと仰らるる其時静小
自害もせんあそく事とありたる上我夫の心よ
反さるる夫婦の道も絶ぬて自身左様申とも
軽々の心ゆと諫めらるる三人も實誤りつるこよ是
しゆと誠めらるる三人も實誤りつるこよ是

へ討手の何寄んそこへ心の付さうい愚さるると舌
と振ふて居たりける折節世間疫癘流行し人多く
死亡しける久保田次郎左衛門頼ひの世に
頼あく見えけし忠興の妻筆とりて

汗

と書記しこれと久保田が枕上張とてうその
病頰と愈しとてやうとて疫神へ素戔鳴尊あ
り天照大神と逐とて思ひ出らとてとて
鄙る都のめり傳はり筑前守の耳に入けれ
ハ細川與一郎とめり出され明智が女あれども反

逆と與力とてとも何とて是と離別とて其
上今明智の跡絶て反びて家あり元の如く
夫妻とありいらん何の憚りあんと許され
うバ忠興もろこび即三戸野の奥より迎て取元の
如く夫婦のうとらひとありたりけりその子
息あやと喜び細川の流絶に實に繁昌ありたるも
賢女の勲と世の人語り傳へり又山國より生長
したる明智が孤ハ細川の家と仕へ三宅藤兵衛と
名乗しとて

慶長五年七月十七日石田三成細川忠興の留守
宅へ使を遣り内室よ入城あると由と申け

とべ内室幼稚の二子と指殺しその身も自殺あり
りしうべ細川家臣川北石見守小笠原勝齋石田
ぐ兵と戦て死とて世人のれと知紫野大徳寺
高桐院に墓あり

重修真書太閤記七編卷之廿四終

